

保育者をめざす学生の音楽表現に関する一考察

—ドラムジカを手がかりとして—

菊 池 由美子

1. はじめに

筆者は、「保育内容 表現」（音楽内容）の講義を通して、幼稚園教育要領および保育所保育指針に示されている領域「表現」のねらいと内容を踏まえ、保育者をめざす学生たちにさまざまな音楽表現を体験させることを念頭に実践してきた。特にこの科目は1年次履修科目のため、幼児教育における経験の少ない学生が対象である。その学生たちがいかに音楽を感じ、それを実際に表現して子どもたちにどのように伝えるかということが課題であった。そこで、音楽の総合表現としてドラムジカを取りあげて、2010、2011年度の2年間、本学幼児教育科における保育内容「表現」の講義の中で導入し、実践を試みた。

本稿では、2年間のドラムジカの導入実践を通して、保育者をめざす学生がいかに自ら音楽を感じ、そしてどのように表現すれば子どもたちに伝えることができるか、それに気付くことができるかという観点で考察することを目的とする。

2. ドラムジカの導入

講義を通して音楽の総合表現を実践にあたり、普段の保育の中で手軽に実践できる作品を学生たちが自分たちで作成して発表することを第一の目的とした。すなわち、既製の作品を使わず、また多くの時間を要することなく、学生たち自ら作品の作成に携わり、発表して子どもたちに伝えることをねらいとした。そこで、オペレッタやミュージカルよりも手軽に総合表現ができるドラムジカの導入を試みるに至った。

ドラムジカとは、ドラマとミュージックから生まれた言葉である。ミュージカルでもない、

オペレッタでもない、子どもたちが知っている歌や歌いたい歌など、既製の子どもの歌を使ってストーリーを考え、台本を作って作品を作り上げるという主旨の音楽劇である。これは、保育者や教師が幼児や小学校低学年の子どもたちと一緒に知っている曲を取り入れながら、アイデアを出しあってストーリーを考え、作品を作って発表することができるものである。

今回、講義の中で実践したドラムジカは、保育者と幼児でアイデアを出し合いながらドラムジカを作成していくという設定ではなく、保育者をめざす学生が幼児を対象としたオリジナルのドラムジカ作品を考え、発表するという設定で行った。

3. ドラムジカの実践

2010、2011年度の2年間にわたり、下記の内容でドラムジカの実践を行った。

< 2010年度 >

- 実施期間：保育内容「表現」
講義15回のうちの最終6回
- 対象学生：盛岡大学短期大学部幼児教育科
1年生173名
- 実践内容
 - 1回目 少人数グループ作成
音楽の選曲、ストーリー作成
幼児のねらい設定、題材の決定
 - 2回目 台本のチェック、小道具作成
 - 3回目 台本見直し、練習
 - 4回目 中間発表
 - 5回目 中間発表の修正をして最終練習
 - 6回目 グループ発表

講義1回目は、初めに4～8人程度の小グルー

プにわかれ、リーダーを決めた。グループ内で各学生がそれぞれ知っている曲あるいは使ってみたい曲などを出し合って、リストアップした音楽からどんなストーリーが考えられるかを話し合わせた。幼児向けの作品として、幼児のねらいや目的を設定することでドラムジカを通して子どもたちに伝えたいことを明確にするようにした。題材については、劇とペープサートが主であったが、他には指人形、踊りなどがあげられた。また、劇と踊りを交えた混合の作品もあった。

2回目は、台本が幼児向けの内容になっているか、幼児にわかる内容になっているか、ねらいと内容が一致しているか、音楽が適度に入っているかなどをチェックした。学生は足りない部分などを補い、追加修正しながら内容を吟味するとともに小道具の作成に入った。

3回目は、次回の中間発表に向けて練習に取り組んだ。

4回目は、中間発表を設定して大まかに作品を演じた。台詞や演技の仕方、音楽、立ち位置など、子どもたちにわかるように表現できているか、小道具も十分かどうかをアドバイスをした。

5回目は、中間発表で気付いたことや反省点を踏まえて、作品の見直しをしながら、発表に向けての最終練習をした。

6回目は、グループごとにオリジナルのドラムジカ作品をそれぞれ発表し、他グループの観賞をした。

< 2011 年度 >

- ・実施期間：保育内容「表現」

講義 15 回のうちの最終 6 回

- ・対象学生：盛岡大学短期大学部幼児教育科
1 年生 177 名

- ・実践内容

2010 年度と同じ内容を 6 回実施

2 年間同じ内容でドラムジカを実践したが、2010 年度の反省点や改善点を考慮して、幼児の前で発表することを学生により意識させる内容を加えた。2011 年度はドラムジカ作品に取り組む前にドラムジカとは別の編成グループで

手遊びの発表を課題として取り組ませた。

4. ドラムジカの実践結果と考察

< 2010 年度 >

講義 1 回目では、音楽のリストアップは順調にいったが、その音楽を使ってどのようなストーリーが考えられるかというところで、なかなか意見が出てこないという状況であった。まだ 1 年生ということで実習経験もなく、子どもたちの前に立って何かを発表するという機会もほとんどないため、当然のことながら発想力や想像力が乏しいのが現実であった。ここでは、選曲した音楽から子どもがどのようなことに興味や反応を示すか、あるいはどのような場面が思い浮かぶか、関連したことはどのようなことがあるかなどを助言した。また、この作品を通して子どもたちに何を伝えたいのかという子どものねらいを意識させた。できるだけ学生たち自身がアイディアを出し合い、話し合いながら作成できるように配慮した。学生たちは、子どものねらいに的を絞ることによって、ストーリーの内容を作っていったようである。

2 回目の台本のチェックでは、台本の内容が子どもの視点に立っていないという作品が多かった。登場人物が分かりにくい、場面の展開が大まかで断片的で理解しにくいなどである。また、学生には理解できる言葉でも幼い子どもたちには言葉が難しすぎて理解できないという内容も顕著に見受けられた。ナレーターの場面説明を加える、あるいは登場人物の台詞を増やしてストーリーの内容や登場人物をわかりやすくするよう指導を加えた。

小道具作りでは、登場人物の作品が小さくて遠くからみてわかりにくい物や小道具が少ないためにストーリーの場面が理解できないというものが多かった。実際に遠く離れた場所から小道具を見ることや、ストーリーの流れを想像して場面の設定を具体的に考えるように指導した。

3 回目では、台本の修正や小道具の作成、ドラムジカの練習と同時進行でなかなかじっくりと練習に取り組めない状況であったが、次回が中間発表ということで少しずつ作品に対する意識が高まっていった。

4回目では、人前で発表することを意識させることを前提に、作品を大まかではあるが通して演じる中間発表の場を設けた。学生たちは実際に演じてみると、台詞を忘れる、声が小さい、登場するタイミングや立つ位置が定まらないなど、思っていたように表現ができなかったことに気付いたようである。頭の中で考えていたことと実際に演技をすることの違いを感じ、人前で表現することに対する意識は高くなったと思われる。中間発表を通して、学生たち自身でいろいろな課題を見つけることができたことは収穫があったようである。

5回目では、中間発表の反省を生かし、修正しながら練習に取り組んだ。学生たちの反応は、中間発表前とは明らかに異なり、人前に出て演技をするという自覚が芽生えてきた。

6回目では、本番で子どもたちの前でドラムジカを発表するという想定で行った。中間発表と比較すれば表現力は数段進歩はしていたが、緊張のために台詞を忘れて間が空いたり、恥ずかしさから声が小さくて台詞がよく聞こえなかったりという状況もみられた。また、子どもの前で演技をするという設定ではあったが、実際は同年代の学生を前にして発表したため、気恥ずかしさなどがあってやりにくい、実際に子どもがいないと実感がわかないということもあったようである。

一方、学生たちは他グループのいろいろなドラムジカの作品を観たことにより、発表する立場、子ども目線で作品をみる立場、相互の体験ができたことで、様々なことに気付くことができたようである。他グループの発表作品から自分たちには思い浮かばなかった発想やアイディアに気付き、子どもの立場になって観ることなどから改善点を発見することができたようである。また、人前で発表するという経験がほとんどなかった学生にとって、模擬体験したことで子どもとの接し方やことばがけ、保育者としての意欲などが芽生えたようである。また、ストーリーを考えて作品を作るということで工夫すること、考えることの大切さを学んだようである。

指導者側からの視点で考察をしたが、ドラムジカの発表後、学生の自由記述による感想等にも触れてみたい。

- ①恥ずかしがらずに子どもにわかりやすいように動作は大きく、表情は明るく、声もはっきりと表現しなければならない。(約半数強)
- ②表現する楽しさを子どもに伝えるには、保育者自身が楽しさを味わい、表現できなければならない。特に顔の表情や声のトーンに気をつけることが必要である。(約1/3)
- ③保育者は子どもの目線で見るのが大切である。(約1/4)
- ④保育者と子どもが楽しさを共有しなければならない。(約1/6)
- (以下、少数)
- ⑤子どもが音楽に関心を持つような工夫や子どもの興味を引くようなことばがけが必要である。
- ⑥表現力を養う柔軟な発想が必要である。
- ⑦グループで活動することでコミュニケーションが密になり、責任感や協調性を学んだ。
- ⑧保育者としての意欲がわいた。
- ⑨準備が足りなかった。

以上、学生の記述から考察すると、実際にドラムジカを発表したこと、他グループの発表を観たことによって、自分たちが考えていたよりも表現することの難しさを体感するとともに、恥ずかしさやいい加減な気持ちで演技していると子どもたちに気持ちが伝わらないことなどを発見することができたようである。学生たちがドラムジカを通して子どもたちに表現して伝えるためには、恥ずかしがらずにきちんと表現すること、保育者として子どもにわかりやすく表現することをもっと意識させて人前に立って発表することが課題であると感じた。

< 2011年度 >

2011年度は、前年度の課題を踏まえ、恥ずかしがらずにきちんと表現すること、保育者として子どもにわかりやすく表現することを学生に気付かせること、より意識させることを重点目標とした。子どもたちの前で発表するという想定での模擬発表の場を多く経験させることが必要であると考え、ドラムジカの前段階で模擬発表を組み込んでみた。自分で作った手づくり

楽器の発表、また手遊びなどのグループ発表の機会を多く経験させた後にドラムジカに取り組んだ。ドラムジカの実践内容については、前年度と同じ内容で実践した。

講義1回目では、前年度同様に音楽のリストアップは順調にいったが、その音楽を使ってどのようなストーリーが考えられるかというところで、アイデアが浮かばないという状況がみられた。しかし、アイデアを出そうと積極的に話し合ったり、助言に対してすぐ反応するなど、前年度と比較すると前向きな行動がみられた。

2回目の台本のチェックでは、子どものねらいに沿ったストーリーになっていたが、場面の展開が大まかなものが多かったため、ナレーターや登場人物の台詞を増やすよう指示した。前年度に比べると、子どもの視点に立っていない作品は少なかった。子どもの前でわかるように発表するということを意識していたと思われる。

小道具作りでは、小道具が少ないためにストーリーの場面がわかりにくいものがあった。ストーリーの流れを想像して場面の設定を具体的に考えるようにした。

3回目では、台本の修正、小道具の作成確認、練習を行った。小道具をすでに準備し終えているグループが多く、中間発表に向けての練習に時間を使う班が多かった。前年度に比べると、準備や進行状況が早く、前向きな取り組みの姿勢が感じられた。

4回目では、作品を大まかではあるが通して演じた中間発表を行った。前年度よりも早い進行状況であったが、やはり音楽劇の経験が少ない学生が多いため、台詞を忘れる、声が小さい、登場するタイミングや立つ位置が定まらないなど、自分たちが想定していたようには演技ができなかったようである。前年度と同様に中間発表を通して、学生たちは課題を見つけることができたようである。

5回目では、中間発表の反省を生かし、修正しながら練習に取り組んだ。学生たちは、中間発表で思うように表現できなかったことから、どうすればできるか、あるいは伝わるかということ話を話し合い、真剣に取り組もうとする意気

込みが感じられた。

6回目では、本番で子どもたちの前でドラムジカを発表するという想定で行った。緊張して台詞を忘れたり、恥ずかしさから声が小さくて台詞がよく聞こえなかったりという場面もあったが、前年度と比較すると表現力が数段進歩した発表となった。子どもの前で発表する機会を多く設けたことと、子どもにわかりやすく伝えるということを常に講義の中で話してきたことが、学生の中でも意識され、演技として活かされたと推察する。また、学生たちはお互いの作品発表を観て、発表する側、子どもの目線で作品を観る側という両方の立場を体験し、様々な発想やアイデア、改善点などに気付くきっかけとなったようである。

前年度のドラムジカの作品発表と比較すると、明らかに変わったと思うことが二点ある。一つは、子どもの前でわかるように発表するという学生の意識が高くなったことである。これは、後述で触れるが、学生の自由記述における感想等からも推察できる。もう一点は、いろいろなグループ発表をするたびに学生の編成メンバーを変えたことにより、学生同士のコミュニケーションが図られ、積極的になるだけではなく、雰囲気も明るく活発なものとなっていた。同じクラスメートと話したこともない、名前すら知らないという学生が多い中、グループ発表を通して学生同士の交流が盛んになったことが功を奏したようである。

発表後、学生の自由記述による感想は以下のとおりである。

- ①恥ずかしがらずに、子どもにわかりやすいように動作は大きく、表情は明るく、声もはっきりと表現しなければならない。(約1/3)
- ②表現する楽しさを子どもに伝えるには、保育者自身が楽しさを味わい、表現できなければならない。特に顔の表情や声のトーンに気をつけることが必要である。保育者の影響が大きい。(約1/3)
- ③保育者は子どもの目線や立場で見ること、考えることが大切である。(約1/6)
- ④恥ずかしさはあったが、音を作る、表現して楽しむことを覚えた。しかし、自分の楽

しさを優先してしまい、子どもの目線で指導することを忘れた。子どもと楽しさを共有することが大事である。(約 1/6)

- ⑤子どもが音楽に関心を持つような工夫や子どもの興味を引くようなことばがけが必要である。(約 1/10)
 - ⑥導入のことばがけや子どもがわかるような説明することが大切である。(約 1/10)
 - ⑦子どもの興味を引きつけながら、子どもの模範となるような保育者をめざす。(約 1/10)
 - ⑧表現力を養う柔軟な発想が必要である。(約 1/10)
 - ⑨子どもへの配慮の仕方や環境の設定、保育者としての自覚などの難しさを知るだけでなく、意欲がわいてきた。(約 1/10)
- (以下、少数)
- ⑩きちんと準備をして対応できるようになりたい。
 - ⑪実際に子どもの前で発表したわけではないので、緊張感が足りなかった。
 - ⑫ドラムジカを発表して、一人ではできないことをグループで話し合い、達成感を感じることができ、表現することの自信につながった。
 - ⑬ドラムジカは自分たち自身、そして幼児たちと一緒に取り組んでできることが分かった。
 - ⑭ドラムジカを通して、子どもがどのようにすれば楽しいか、喜ぶのかということを話し合い、保育者の目線で考えることができた。
 - ⑮子どもの前で発表をするという設定でドラムジカを発表し、また他グループの作品を子どもの立場で観ることで改善点や問題点の発見や、新しいアイデアなど参考点を知ることができた。

以上、学生の自由記述をみると前年度と同じ内容は書かれているが、①と③の項目については前年度よりも減っている状況である。逆に、

少数ではあるが具体的な反省点や改善点が書かれているのがわかる。ここからも、学生の発表や表現に対する姿勢や意欲が高くなっていること、それから子どもの視点で考えることなど、目的意識が高くなっていることが推察できる。表現することの難しさを体験したことにより、いかに表現すれば子どもたちに伝わるかということを考えるようになったことを意味している。

5. まとめ

本稿では、音楽の総合表現としてオペレッタやミュージカルよりも手軽に導入できるドラムジカを取りあげ、講義を通して2年間実践を試みた。限られた時間での作品作り、幼児教育の経験が少ない1年生ということで、なかなかアイデアが浮かばずに台本作りに手間取るなどの課題はあったが、台本のチェックや中間発表を設けて、できるだけ学生たち自身でドラムジカを作成して発表するということを念頭において助言してきた。2010年度の実践から2011年度はドラムジカに取り組む前に人前で発表する場を多く設けてからドラムジカを同じ内容で実践した。発表することを経験した学生は、自分だけではなく相手の立場になって考え、伝えることを意識するようになった。また、改善点やどのようにすればよりわかりやすく伝えることができるかということを創意工夫するようになった。

今後は、ドラムジカのみならず、さらに子どもたちに伝えるということを学生により意識させながら、表現する幅を広げさせたい。

参考文献

- 1. 伊藤嘉子編『子どもとつくる劇あそび ドラムジカ』音楽之友社 2000年
- 2. 伊藤嘉子編『ドラムジカへのおさそい 導入』エー・ティー・エヌ 2000年
- 3. 伊藤嘉子編『作って表現 とっておき20の実践』音楽之友社 2001年